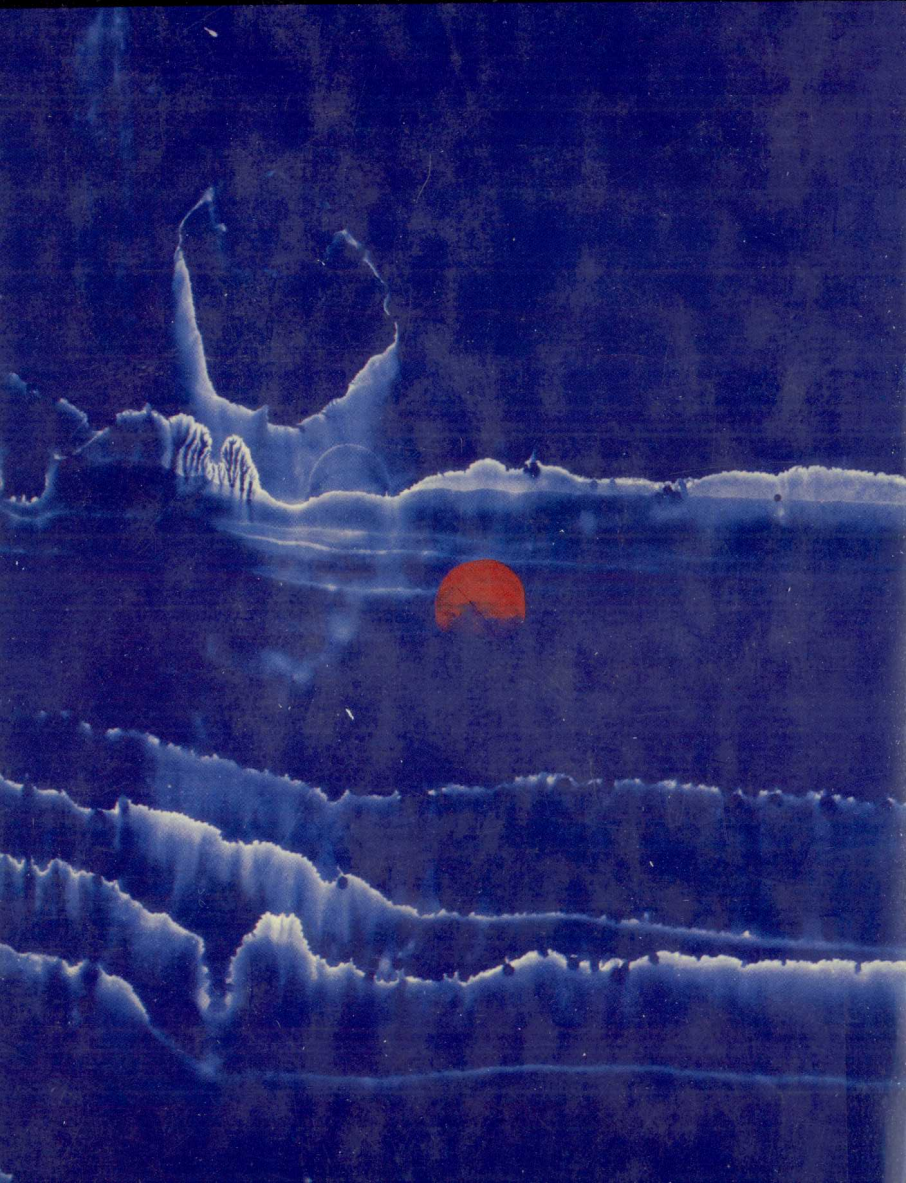
旅人たちの南十字星　佐木隆三



らの南十字星

佐木隆三

文藝春秋

佐木隆三（さき・りゅうぞう）
1937(昭和12)年北朝鮮生まれ。福岡県立八幡中央高校卒業。63年「ジャンケンポン協定」で新日本文学賞受賞。64年まで八幡製鉄に勤務。76年「復讐するは我にあり」で第74回直木賞受賞。著書に「埋火の街で」「偉大なる祖国アメリカ」「ドキュメント狭山事件」「殺人百科」「実験的生活」「曠野へ」「海燕ジョーの奇跡」などがある。

旅人たちの南十字星
昭和五十五年五月一日　第一刷
定価　九〇〇円
著者　佐木隆三
発行者　杉村友一
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五・一二一一
印刷　共同印刷
製本所　加藤製本
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Ryuzo Saki 1980　Printed in Japan

旅人たちの南十字星／目次

1 国際高速バス 5
2 イグアスの滝 13
3 リベルダーデ 31
4 アスンシオン 42
5 ICPO手配 64
6 中南米特派員 77
7 ドップス刑事 93
8 ボアッチの女 107
9 保険金支払い 119
10 アミーゴたち 138
11 刑事局長補佐 151
12 マラプアーマ 165
13 台湾マフィア 181
14 アラグアイア 194
15 バンデランチ 212
16 火葬許可判決 222

裝幀

司

修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

〈書下し長篇小説〉

旅人たちの南十字星

ベネズエラ
コロンビア
エクアドル
ペルー
ボリビア
ブラジル
パラグアイ
チリ
アルゼンチン
ウルグアイ
太平洋
大西洋
赤道
南回帰線
マナウス
ベレン
コンセイソン・ド・アラグアイア
ブラジリア
リマ
ラパス
リベロン・プレット
サンパウロ
リオデジャネイロ
サントス
イグアスの滝
アスンシオン
モンテビデオ
ブエノスアイレス
サンチアゴ
プラタ河
ホーン岬
1000 km

（地図　高野橋康）

1 国際高速バス

一九七九年四月七日午後五時四十分ごろ、パラグアイ東部の大草原を走っていたバスが、坂の途中で停った。アスンシオン発が午後二時四十五分で、途中のオヴィエドで三十分ほど休憩し、ふたたび走り出した直後のことだった。ブラジル国境まで、あと二百キロ弱の地点である。

客室との仕切りのドアが開いて、赤いシャツの運転手が出て来た。アルゼンチン側から到着したとき、黒いシャツの小男が運転していたが、アスンシオンでパラグアイ側に引継いだ。国境まで交替なしで走るらしい、パラグアイ人の運転手は、三十歳ぐらいだろう。血色のよい大男で、艶のある頬を、ぷうっとふくらませている。道路わきにバスを停めたあと、何度も始動スイッチを入れるのだが、徒らに空転する。すっかり腹を立てているらしく、アスファルト舗装の路面に降りると、まずタイヤを蹴った。それから車体側部の収納庫を開けると、ドライバーやスパナを取出し、あいかわらず怒った表情で運転室へ引返して、点検をはじめた。

その間に、何ら説明はなされない。ほぼ満席の乗客たちは、べつだん騒ぐでもなく、中ほどに居る学生グループのコーラスは、車が停ってからも続いている。七人の男女学生は、ブエノスアイレス〜サンパウロ間のキップを示していた。ブエノスアイレスからラプラタ河沿いに北上して、

パラグアイの首都アスンシオンまで千三百五十キロ。ここから真東へ走ると、サンパウロまで千四百キロ。学生たちは二千七百五十キロの、国際バスの旅なのである。途中で宿を取らなければ、二昼夜というもの乗りづめになる。

バスに飽きていたのか、最初に外へ出たのは、この学生グループだった。白い車体に赤色の流線で、屋根に近いあたりに、〈PLUMA〉と青い文字がある。後尾には、チリ、アルゼンチン、パラグアイ、ブラジルの、四つの国旗が描かれている。もし起点のサンチアゴから乗れば、南米大陸を横断する、四千キロ余の旅になる。学生たちはバスの後部に回って、夕焼けに気づいた。大草原が拡がる地平線のあたり、赤い炎のようだった。玄武岩と輝緑岩の風化土壌の、肥沃なテーラ・ロシア地帯の赤い土ぼこりが、いっそう空を燃やしているのかもしれない。インディオの血が混っているとみられる、褐色の肌の面長な娘が、両手を拡げて走り出した。一直線の下り勾配を駆けて行き、夕焼け空を抱き取ろうというのだろうか。つられて仲間たちが、ズック靴をぺたぺた鳴らしながら、叫び声をあげて走った。

やがて他の乗客たちも、バスの外へ出はじめた。ドアに近い座席の、三十歳くらいの白いドレスの女に、いくぶん若い茶色っぽい服装の男は、降りるなりバスの前方へ回り、抱き合って長いキッスをした。そばかすの多い、顎のしゃくれた女は、抱擁のあいだ目をしばたたいて、涙を流していた。後から降りた、揃って肥満体の老夫婦が、すぐ側でキッスの二人を眺め、ゆっくり道路を横断して行った。このバスが走っているあいだ、対向車は少なかった。今こうして停っていても、はるか向うに車の影が見えるだけで、近づいてくるまでだいぶ時間がかかる。国土の広さは日本の一・二倍で、人口が二百八十万のパラグアイは、農耕地が全面積の四パーセントにすぎず、林業と牧畜が産業の中心だが、一九七六年の統計によれば、国民一人当りの所得は六百二十

五ドル。これはブラジルの二分の一、アルゼンチンの三分の一でしかなく、アスンシオンから大瀑布のあるイグアスまで、延長三百三十キロのルート2～7国際道路も、米州機構などの援助で開通した。

赤いシャツの運転手が、工具の袋を持って飛び降りた。こんどはタイヤを蹴ったりせず、タバコをくわえて思案顔だった。ひょろりと背の高い、スーツにネクタイのセールスマン風が話しかけたら、言葉が通じないと手を振った。パラグアイ人は、九十パーセント以上が、スペインからの入植者と、インディオのグァラニー族の混血であり、スペイン語とグァラニー語を国語とする。国際バスの運転手が、グァラニー語しか使えぬということはなく、言葉があまり通じないのなら、話しかけたほうがポルトガル語だったのだろう。あれこれ混乱させないでくれと言わんばかりに、不機嫌にタバコをふかしている運転手の側から、ブラジル国籍らしいセールスマン風は離れて行き、夕焼けにかざすように時計を見た。

すでに六時を回っている。日が暮れるまで、しばらく間はあるだろうが、このまま動かなかったら、どうなるのか……。すこしずつ、心配する者がふえてきた。後方の便所に近い、左側の座席に並んだ、黄色い肌の二人の中年男は、窓の外を眺めて、ときどき低い声で言い交してはいるものの、なかなか動こうとしなかった。しかし運転手が、タバコの吸殻を捨てたあと、ただ腕組みをして頬をふくらませているのを見て、通路側の男が席を立った。

アスンシオンから乗ったこの二人連れは、ドライブインで休憩のとき、皆とはすこし離れた席で、静かにビールを飲んでいた。背丈はほぼ同じで、一メートル七十五センチくらいである。席を立ってドアのほうへ歩き出した男は、目立つほど痩せて顔色もよくない。長めの髪を七・三に分けて、縞の入ったカラーシャツに、エンジ色のネクタイを締めている。席に残った男は、ちぢ

れ毛にパーマネントウェーブをかけ、濃い眉に大きな鼻で、体重は八十キロを超すだろう。こちらもきちっとネクタイを締めているが、スーツの胸ポケットには、モンブランのボールペンがさしてある。痩せた男は、窓際の席の恰幅のいい男の同意を得て、バスの外へ出ることにしたのだった。

「ガソリン・タンク」

降りた男は、神経質そうな細い眉を寄せ、運転手に話しかけた。どこか女性的な、かん高い声は、しかし赤シャツの大男の耳には、とどかなかったらしい。首をかしげたついでに、前に垂れた髪をかきあげると、こんどは近づいて正面から、

「ガソリン・タンク?」

と問いかけた。

その態度は控え目で、運転手の体面を傷つけまいとの、配慮が見られた。だから運転手は、肩をすくめて苦笑し、バスの計器類へ向けて顎をしゃくった。ガソリンの量ぐらい、とっくに確めている、何ならお前もメーターを覗いてみるかい、とでも言おうとしたようだった。

「エックスキューズ・ミー」

軽く会釈して、痩身の東洋人は、バスへ戻った。客席のほうではなく、運転室に入ったのだが、この時点ではまだ、彼の動きに注目する者は居なかった。仮に見ていたとしても、余計な口出しをしてぶん殴られねばいいがと、舌打ちする程度のものだったろう。どこか影の薄い東洋人は、遠慮がちに運転室のメーターを見ると、すぐに引返して頷いた。なるほど問題はない、国境へ行くまで燃料は保つ計算だが、しかし念のためにと、くぼんだ目が訴えている。

「ガソリン・タンク」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「フーン」

さきほどのように、運転手は肩をすくめたが、精悍な顔に不安が過った。そこで腕組みを解くと、大股に歩いてバスの後部へ回った。ガソリン・タンクは、左側にあるらしい。坂の下を見やり、車が来ていないのを確めると、運転手はボディの扉を開け、注入口の栓をはずした。そして体をすり寄せ、タンクの中を覗こうと試みているのだった。

ぶらぶらと、あたりを歩き回っていた乗客たちが、次第にバスのほうへ戻って来た。坂道を下りきって、小川にかかる橋の欄干に腰かけていた学生グループも、動きに気づいて向うから手を振っている。いつまでもキッスを繰返しているカップルの、男のほうがそれに応えた。事態が好転する兆を読みとったのだろうが、そばかすだらけの女のほうは、すっかり目を泣き腫らしていた。

「エックスキューズ・ミー」

痩身の東洋人が、ガソリン・タンクを調べている運転手の、肩をたたいた。いつの間にか道端の、一メートルほどの草を抜いて、手で葉を削ぎ棄てているのだった。

「プリーズ」

はにかみながら、その茎を差出す。運転手は、頬をふくらませたまま受取ると、さっそく注入口から突っ込んだ。しばらく掻き回すようにし、抜出して確めたところ、まったく濡れていない。

「……」

やはり、空だったのだ。膝をついた運転手が、溜息をついて見上げた。このとき怒気も洩れてしまったらしく、ぷうっとふくらんでいた頬は、もとどおりになった。目が合った東洋人は、いっそうはにかんだように、白い指で鼻を撫でた。そういえば彼の鼻は尖った感じで、薄い唇がめ

くれたとき見える歯は、いかにも清潔な印象だった。
原因が分ってからの、運転手の動きは、敏捷であった。坂を上って来る車に、立ちふさがるようにして停めると、早口にまくしたてる。一台目の乗用車は、黒人の家族連れで、話しを途中までしか聞かず走り去った。二台目はコーラ瓶を満載した赤いトラックで、いちおう聞くだけ聞いて、坂を上って行った。バス会社に電話連絡でも頼んでいるのか、給油車を呼ぶ手筈なのか。痩せた東洋人は、やりとりに耳を傾けていたが、まったく意味が分らなかったらしく、じきにその場を離れた。次に坂を上って来たのは、家畜運搬用のトレーラーで、空車ながらノロノロした動きだった。訴えを聞くとただちに了解して、バス運転手を乗せて走り出した。
取残された恰好の乗客は、ふたたび道の面側に散ったものの、すでに日は沈んだことだし、離れて行く者は居ない。ついさっき、ガソリン切れを指摘した男は、バスの中に引返し、指定の26番に坐っていた。とりたてて手柄顔をするでもなく、無表情に顎を動かしているのは、チューインガムを噛みはじめたからのようだ。隣りの25番では、リクライニング・シートを倒して、やはりガムを噛みながら寝そべっている。その真上の網棚に、紙袋が一つ載っており、これが二人連れの荷物のすべてだった。アスンシオンから乗込むとき、預ける荷物について問われて、他には何もないと答えていた。パスポートのチェックもなされ、出国カードも添付されていたから、これからブラジル入りするにちがいない。国際バスの乗客として、あまりにも身軽だが、バスターミナルには同じ東洋人が見送りに来て、なにかと世話を焼いていた。あるいは荷物は、別送したのだろうか。
日が落ちて、だいぶ暗くなってきた頃に、トレーラーが引返して来た。上下つなぎの作業服を着た初老の運転手は、人の善さそうな笑顔で、停めるか停めないかのうちに、バス運転手が飛び

降りた。左手にバケツ、右手には一メートル余りのゴムホースを持っている。いったい何が始まるのか、乗客たちは一瞬あっけにとられたが、たちまち納得がいった。赤いシャツの大男は、トレーラーのタンクの栓を開け、ガソリンを吸い出しにかかったのだ。ゴムホースの端を口にくわえ、比重〇・七の液体が昇ってきて唇に触れた途端に、パッと放して指でおさえる。それをバケツに向け、ゆっくり流し込む。こうしてバケツが一杯になると、こんどはバスのほうへ行き、同じ要領でタンクに移す。トレーラーとバスの間を、三往復した頃には、あたりはすっかり闇だった。

運転手は、バケツとゴムホースを、トレーラーの荷台へ放り投げると、シャツの袖で口の端をぬぐいながら、小走りに運転室へ入り、すぐに始動させた。初めのうち空転して、車体が小刻みに揺れるだけだったが、そのうち連動して、力強い響きのエンジン音になった。

「ビバ！」

闇の中から喚声があがり、続いて拍手が起った。暗くなってからというもの、さすがに不安になっていたのだ。

「……」

言葉にならない声を発して、運転手は初めて笑顔を見せた。エンジンをかけたまま、乗客が揃うのを待ち、それから人数を確認するために、客席の通路をゆっくり歩いた。

そして26番シートで立ち止まると、

「サンキュー！」

大声で手を差出した。

ガムを噛んでいた痩身の男の、蒼白い顔が紅潮した。握手を求められるなど、まったく予想し

ていなかったらしく、こわばった腕が動かない。すると25番シートの男が、横から小突いて促して、ようやく握手になった。その様子を、前方の乗客は立上って見ていたが、握手の意味がしばらく分らなかったようだ。

エンジンが停止して、一時間半ぐらい経っていた。ようやく走り出したバスは、遅れを取戻すために、たちまち速度を上げた。しかし客席には、さざ波のように情報が拡がって、エンジン・トラブルの原因がガス欠と指摘したのが、後ろの東洋人であることが知れ渡った。そのため改めて振り向く者も居て、26番シートの客は、ますます緊張してしまい、紅潮した頬がひきつっている。

中ほどの男子学生が、つと立上って近づいて来た。

「アー・ユー・チャイニーズ？」

「……」

問われた男は答えられず、わなわなと唇を震わせるだけだったが、隣席の恰幅のいい男がリクライニング・シートを起し、客席全体に響くような太い声で言い放った。

「ノー。ジャパニーズ！」

その返答に対する、乗客たちの反応は、日本人にとって心地よいものだった。

「ハポネス」

「ジャポネース」

スペイン語とポルトガル語それぞれに、好意と畏敬の念がこめられている。25番シートの客が、大きな鼻をぴくつかせながら満面に笑みをたたえたので、26番シートの客の緊張も、ようやく緩んだようだった。

2 イグアスの滝

四月八日午後二時ごろ、フォス・ド・イグアス市の七十歳になるスーパーマーケット経営者は、ボートを漕いでいる二人連れから、声をかけられた。

「よかったら、乗りませんか」

ダミ声の日本語は、さほど優しい印象ではなく、窮状を見かねての、誘いだったのかもしれない。さきほどから小学一年生の孫娘が、しきりにボートに乗りたがっている。日曜日とあって、以前からの約束をはたすため、嫁の運転する軽トラックで来て、イグアス川の岸辺で遊んでいたのだ。アルゼンチン、ブラジル国境のイグアス川の大瀑布は、落差が八十メートルあって、全幅は五キロにおよぶ。ここから二十数キロ下れば、パラナ河と合流して、パラグアイとの三国国境地点である。

「いや、結構ですよ」

川べりのベンチに掛けたまま、手を振って答えた。秋たけなわで人出が多く、弁当をひろげる家族連れが目に入った。たいてい若い男女か、親子というのに、この日本人は中年男同士だったから、気になってはいたのだ。それに二人は、わざわざボートを漕ぎ出しているのに、さほど楽

しげな表情でもないのだった。
「遠慮は要らないのに、おじいちゃん」
誘っているのは、紙袋を持って舟尾に坐っている、恰幅のよい男だった。オールを握っているのは、痩せて色白な男で、いかにも神経質そうに見える。この漕ぎ手も、乗せることには賛成らしく、ボートはどんどん近づいて来る。
「ジイチャン！」
誘われていると分って、孫娘の表情が輝いた。多忙な母親は、新規採用の店員にトラブルが生じているとかで、三時すぎに迎えに来るといい、街へ引返した。自動車の運転免許さえ持たぬ「ジイチャン」としては、ボートなどもってのほかだった。なにしろ、この子の父親である次男は、二年前に交通事故で死んだ。
「おいで、お嬢ちゃん」
ボートを岸につけて、手招きしている。太い鼻、濃い眉の大男が、愛想笑いなのだ。
「じいちゃんと一緒なら、恐くないね」
「……」
「年はいくつ？　お名前は？」
型通りの質問を浴びせられても、孫娘としては、答えようがない。市立小学校に通っているから、友だちはもとより親との会話もポルトガル語であり、祖父母と一緒に居るとき、日本語を強要される恰好なのだ。
「いやあ、これはブラジル三世でしてね」
じいちゃん、じいちゃんと呼ぶ声が耳についたらしい二人連れに、説明しないわけにはいかな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.